



くらしの植物苑だより

みどりの日スペシャル

生きている文化財、そして人とのかかわりがまるごとそこにあるくらしの植物苑

辻 誠一郎（東京大学）

歴博のくらしの植物苑は1995年の秋に開苑しました。日本人の民俗の中に生き続けているくらしの中の植物たちを育て、その姿かたち、生きざまを公開しようとして作られたものです。食べるための植物や薬として利用する植物、道具や建物などものを作る時に利用する植物など、暮らしの中に深く溶け込んできた植物たちがいくつかのゾーンに分けられて育てられています。種子や果実を利用する植物、葉を利用する植物、木材を利用する植物、あるいは植物1個体か多数の個体の集団を利用したり、それにかかわったりする植物が、小さな苑内に配置されているのです。ですからきれいな花を咲かせる植物だけを集めたバラ園や花ショウブ園、あるいは特定の利用目的に焦点をしばった薬用植物園などとは、育てられている植物の種類や育て方も違っているのです。



人と植物のかかわりは実に多様です。それは、私たちの周囲にあまりにもたくさんの植物があたりまえのようにあることから容易に理解できます。ただ、あまりにもあたりまえに、そして身近にあるために人と植物のかかわりについて取り立てて考えてみる機会が少ないのではないのでしょうか。くらしの植物苑は、実に多様な人と植物のかかわりをとらえなおし、忘れ去られようとしている植物との深くて長いかかわりや、植物との今日的な新しいかかわりの発見の機会をつくってくれるところだと言っても過言ではありません。

植物とのかかわりは身近な自然とのかかわりから生じたことは間違いありません。むしろ自然とのかかわりから人が誕生してきたとも言えるでしょう。そう考えると人が誕生する以前から植物とのかかわり方が作られていったのかも知れません。おそらく食べ物や道具の材料として、もっとも早くにかかわりができていったのではないのでしょうか。

その証拠に、食料となる栽培植物の元となった原種が集中している地域を中心にしてさまざまな文明が誕生しています。さまざまな栽培植物を作り上げ、そしてそれらを大量に生産する農業という活動が多様な文化を育てていきました。栽培植物は有用であるがゆえに各地に伝播していき、日本にも、先史時代から古代にかけては近隣の大陸から、中世以降は世界中から海を渡って多種多様な栽培植物がもたらされました。それらとともに雑草と呼ばれている巨大な一群が長年にわたって日本にもたらされました。

農業とともに林業も古くから植物と深くかかわってきた活動の一つです。自然の森林資源を利用するだけでなく、木材を資源として利用する樹木を植林してきました。スギ林やアカマツ林は典型的なもの

です。防風・防火など多目的に屋敷や集落の周囲に樹木を植栽してきました。関東平野のシラカシの屋敷林もその典型的なものです。

農業・林業とははっきり区別することができない世界があります。園芸です。古代の園芸センターの一つである中国から日本にも多数の園芸植物や文化が伝えられました。菊（キク）はその代表です。中世から近世にかけても大きな伝播の波があり、伝わった植物や文化が日本で独自の発展を遂げていきました。古典園芸植物あるいは伝統植物と呼ばれています。春の桜草、夏の変化朝顔、秋の古典菊、冬の上野山茶花（サザンカ）がその代表です。

くらしの植物苑の植物は人と深くかかわってきました。すなわち人が深くかかわらなければ失われてしまう植物でもあるのです。いわば人が長年かけて作り上げ保存してきた文化財を人とのかかわりとともにまると保存・公開しているのがくらしの植物苑だということになるのです。

次回予告

○第9 1回くらしの植物苑観察会

5月27日（土）「稲の来た道」 江口 誠一（千葉県立中央博物館）

13:30～15:30（予定） 苑内あずまや前集合 申込不要 要入苑料

○第8回日本の植物文化を語る

6月24日（土）「近世都市江戸の環境史－水と花とゴミ－」 谷川 章雄（早稲田大学大学院）

13:30～15:30（予定） 本館講堂 申込不要 聴講無料